

幼児教育学科学生の性格特性について

幼児教育学科 林 悠子

1. はじめに

現在、講義や日常生活において学生たちと接する中で、短大生とは思えぬほど子どもっぽい面に出会ったり、また逆に学生らしからぬ冷めた一面を目にしたりと驚くことが多い。現代っ子と一括りにしてしまうことも可能であるが、学生生活を経て社会に出るまでのこの2年ないし3年間というのは、人間性を鍛え成長するには決して長いとはいえない期間である。そんななか、N女子短大幼児教育学科の学生の多くは幼稚園教諭、保育士を目指して勉学に励んでいる。大学での講義の他に、学生らの学ぶ場所として大きなものに、実習の場が挙げられる。ここでは、いざ実習の場において必要とされる知識や技能といった専門的資質はもちろんのこと、人間性、社会性といった学生自身の資質が問われるであろう。

学生らの対人的な性格特徴を捉えるために、ここではエゴグラムを用いて分析を行う。エゴグラムとは、バーン (Berne, 1964) の提唱する交流分析理論に基づき、デュセイ (Dusay, 1977) によって開発された心理検査である¹⁾。交流分析は世界的に広まっている自我心理学的な観点から展開された集団心理療法であり、日本においても九州大学の池見や杉田らによって医学領域で導入され、心身症や神経症の治療に効果をあげている。以来、現在では心理学、教育機関、産業界等においても幅広く応用されており、性格傾向、対人関係のとり方、行動様式の理解などに活用されている。スポーツ心理学においても、アスリートの対人的性格をつかむことにより、日々の練習やメンタルトレーニング、所属集団での円滑なコミュニケーションなどに役立てるために活用されている。

交流分析は四つの基礎理論と三つの理論的背景より構成されている。四つの基礎理論のひとつである構造分析では、人格構造を分析するものであり、そこには親 (Parent)、大人 (Adult)、子ども (Child) の三つの自我状態があるとされ、その自我状態がどのような仕組みになっているのかを分析するのが構造分析の目標とされている。エゴグラムはこの自我状態を明らかにするための技法であり、日本においては東大心療内科グループの石川らにより開発された東大式エゴグラム (TEG) が、またその後開発されたTEG第2版、新版TEGなどが用いられているが、TEG以外にも多くのエゴグラムが作成されている。

TEGでは、交流分析の三つの自我状態の配分を測定しているが、この三つの自我状態はさらに五つにわけられる。五つとは、親 (Parent) がそれぞれ「父親的な役割を担う批判的な親 (Critical Parent : 以下CPとする)」、「母親的な役割を担う養育的な親 (Nurturing Parent : 以下NPとする)」、大人 (Adult : 以下Aとする)、子ども (Child) がそれぞれ「もって生まれた自然な姿である自由な子ども (Free Child : 以下FCとする)」、「親の影響を受けた順応した子ども (Adapted Child : 以下ACとする)」である。各個人が持つと仮定されるこの五つの自我状態のバランスを視覚的に提示することで、おのおのが

客観的に自分自身の対人的な自我状態のパターンを把握できるようになる。

そこで、本研究においては、まず学生の性格特性を明らかにすることを目的とする。1回生と2回生を対象にし、各学年・クラスの特徴を理解し、その上で、学生らの指導や講義においてそれらを考慮したり、また良い部分を伸ばしたり足りない部分を補ったりすることで、学生らの質の向上につながるようにしたいと考える。

2. 方法

(1) 対象

N女子短期大学幼児教育学科における体育専門科目受講の学生を対象とした。被験者の内訳は以下の通りである。

幼児教育学科第一部1回生（2クラス）28名（ 18.6 ± 1.53 歳）

A：16名（ 18.7 ± 1.54 歳） ・ B：12名（ 18.4 ± 1.44 歳）

幼児教育学科第三部2回生（3クラス）53名（ 19.6 ± 1.67 歳）

C：20名（ 19.4 ± 0.49 歳） ・ D：21名（ 19.3 ± 0.46 歳） ・ E：12名（ 20.7 ± 3.26 歳）

(2) 調査方法

調査用紙には東大式エゴグラム（TEG）を用いた。学生には調査主旨を説明し了解を得た上で、授業時間の一部を利用して全員一斉に行った。回答時間は15–20分であった。

(3) 調査用紙と分析方法

TEGは、60項目からなる質問紙で、各項目に対し“はい（○）”、“いいえ（×）”、“どちらでもない（△）”の3件法で回答するものである。質問項目は10項目ずつ、自我状態を表す5つの尺度（CP・NP・A・FC・AC）を構成しており、残りの10項目は質問に対する妥当性尺度を構成し、TEGに対する回答態度の信頼性の判定に用いられる。回答は“はい（○）”：2点、“いいえ（×）”：0点、“どちらでもない（△）”：1点として得点化され、尺度ごとに合計点を算出し、分析を行った。

また、TEGは“どちらでもない”で回答した項目によって構成される疑問尺度（Q尺度）を備えており、合計点が35点以上の場合には防衛的な態度や決断力の乏しい優柔不断さが顕著になり、判定する上で信頼性が乏しくなるとされている。本研究においても、Q尺度で35点以上を示した被験者については分析対象から外すものとする。

統計処理にはすべて解析ソフトSPSS 11.0 J. for Windows を用いて分析を行った。

(4) 調査実施日

2007年7月18日（1回生）、7月19日（2回生）両日の各クラスの講義時間。

3. 結果

得られた81名の回答のうち、Q尺度が35点以上であった被験者3名（1回生A組1名・B組1名、2回生C組1名）については分析から除外した。そのため、最終的な分析対象は1回生A：15名・B：11名、2回生C：19名・D：21名・E：12名であった。

(1) 各クラスの結果

各クラスのエゴグラム の平均値と標準偏差を示す（表1、図1-5）。いずれのクラスも、NP尺度得点が最も高く、CP尺度またはA尺度得点が低い傾向が伺われる。各クラスにおける1要因分散分析を行ったところ全クラスにおいて主効果に差がみられたため、Bonferroniの多重比較を行った（分散分析の結果は表2に示す）。

その結果、NP尺度得点がCP尺度得点に比べて有意に高いことがA組、C組、D組、E組において認められた。A尺度得点がNP尺度得点ならびにAC尺度得点に比べて有意に低いことがB組、C組、D組において認められた。CP尺度得点がAC尺度得点に比べて有意に低いことがC組、D組において、またFC尺度得点に比べても有意に低いことがD組において認められた。

これらのことから、学生らの自我状態は「母親的な役割を担う養育的な親」や「子ども」の部分が多く、「父親的な役割を担う批判的な親」や「客観的かつ論理的にものごとを理解できる大人」の部分が少ないことが示された。

表1. 各クラスのエゴグラムの平均得点とSD

	CP		NP		A		FC		AC	
	Mean	SD								
A	8.1	3.61	14.9	4.42	10.4	3.72	12.2	4.90	11.7	5.22
B	9.7	3.47	13.9	3.11	8.3	3.58	13.3	3.23	13.5	4.91
C	10.5	4.03	14.8	2.90	10.3	4.64	12.2	4.19	14.6	3.55
D	8.2	3.53	15.5	3.59	10.0	3.31	12.3	3.95	13.4	4.10
E	9.0	3.88	14.2	1.95	10.6	3.48	12.1	4.87	12.5	4.06

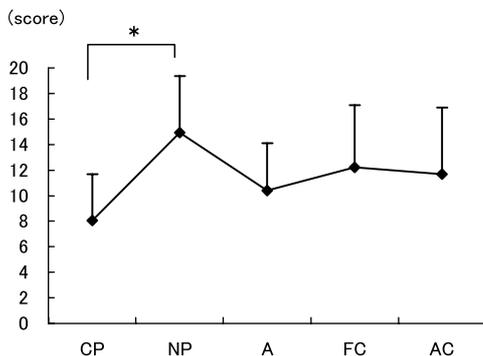


図1. A組におけるエゴグラムの平均得点とSD(N=15)
* p < .05

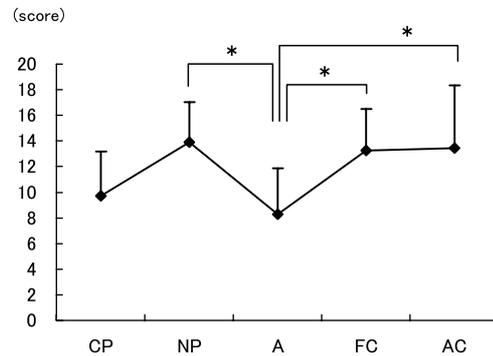


図2. B組におけるエゴグラムの平均得点とSD(N=11)
* p < .05

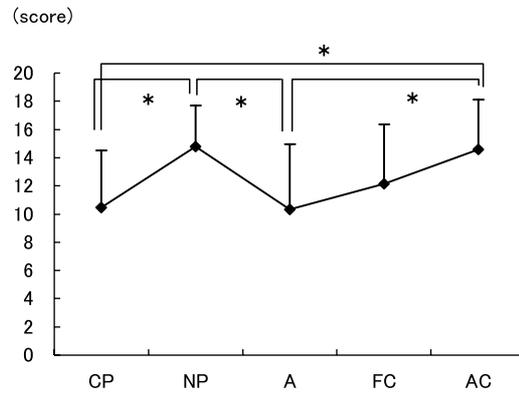


図3. C組におけるエゴグラム平均得点とSD(N=19)
* p < .05

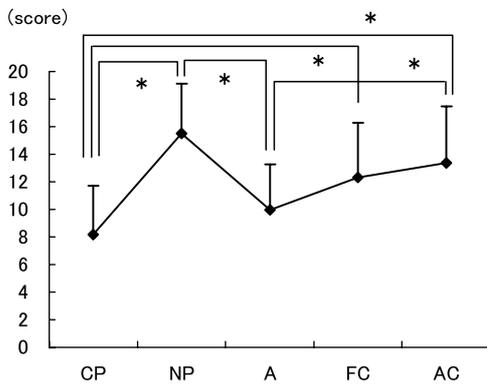


図4. D組におけるエゴグラム平均得点とSD(N=21)
* p < .05

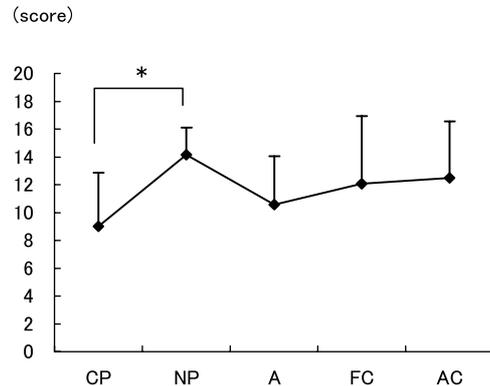


図5. E組におけるエゴグラム平均得点とSD(N=12)
* p < .05

表2. 各クラスにおける1要因分散分析値

A組					
変動因	SS	df	MS	F	有意確率
尺度	379.39	4	94.85	4.86	0.00
誤差	1367.20	70	19.53		
全体	1746.59	74			

B組					
変動因	SS	df	MS	F	有意確率
尺度	286.73	4	71.68	5.19	0.00
誤差	690.18	50	13.80		
全体	976.91	54			

C組					
変動因	SS	df	MS	F	有意確率
尺度	352.46	4	88.12	5.77	0.00
誤差	1375.16	90	15.28		
全体	1727.62	94			

D組					
変動因	SS	df	MS	F	有意確率
尺度	694.34	4	173.59	12.62	0.00
誤差	1375.05	100	13.75		
全体	2069.39	104			

E組					
変動因	SS	df	MS	F	有意確率
尺度	184.83	4	46.21	3.25	0.02
誤差	782.50	55	14.23		
全体	967.33	59			

(2) 学年による比較 (全体)

1回生 (2クラス; 26名) と2回生 (3クラス; 52名) のエゴグラム の平均値と標準偏差を示す (表3、図6)。平均得点は、FC尺度以外ですべて2回生が1回生を上回っていたが、各尺度において学年間の差の検定を行ったところ、有意な差は認められなかった。

表3. 各学年のエゴグラムの平均得点とSD (1回生; N=26, 2回生; N=52)

	CP		NP		A		FC		AC	
	Mean	SD								
1回生	8.8	3.58	14.5	3.88	9.5	3.74	12.7	4.23	12.4	5.07
2回生	9.2	3.86	14.9	3.02	10.2	3.82	12.2	4.18	13.6	3.91

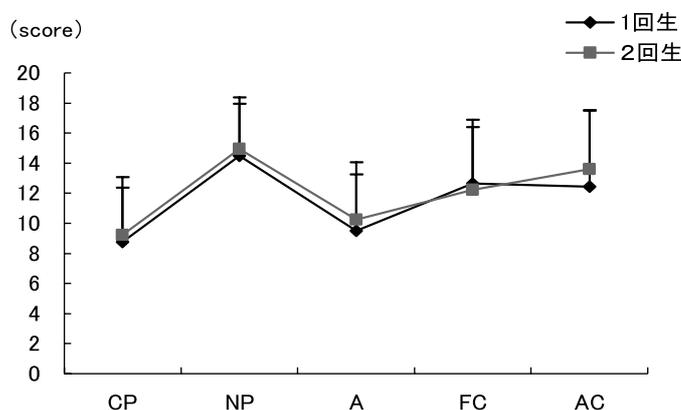


図6. 各学年のエゴグラムの平均得点とSD (1回生; N=26, 2回生; N=52)

(3) 個人プロフィール型の分類

各個人の尺度得点から、標準化されたエゴグラムプロフィールを作成し、得られたプロフィールを19パターン (さらにパターンを細分化した29種類) に分類し、どのパターンが多いのかを調べた。

最も多いものから、AC尺度だけが低い「AC優位型」13名 (16.7%)、NPとACの2尺度が同程度に高くCPとFCが相対的に低い「N-II型」8名 (10.3%)、NPとACの2尺度が同程度に高くCPとAが相対的に低い「N-I型」とCPとFCの2尺度が同程度に高くNPとACが相対的に低い「逆N-II型」6名 (7.7%)、NP尺度だけが低い「NP優位型」5名 (6.4%) というように、定められた19パターンのうち、15パターン22種類に分類された。全パターンの人数と割合は表4、図7に示す。

各尺度の平均得点ではなく、各個人の自我状態における標準化されたパターンからは、AC尺度すなわち「親の影響を受けた順応した子ども」の自我状態を持った学生が多いことが示された。次いで、そこに「母親的な役割を担う養育的な親」の部分をあわせ持った学生や、「父親的な役割を担う批判的な親」の部分と同時に「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」の自我状態をあわせ持った学生が多いことが示された。

表4. 分類された個人エゴグラムプロフィール型の人数と出現頻度(%), N=78

	AC優位型	NII型	NI型	逆NII型	NP優位型	CP優位型	FC優位型	UI型	W型	A低位型	UII型	逆NIII型
N	13	8	6	6	5	4	4	4	4	3	3	3
%	16.7	10.3	7.7	7.7	6.4	5.1	5.1	5.1	5.1	3.8	3.8	3.8

	CP低位型	FC低位型	逆NI型	M型	平坦II型	NP低位型	AC低位型	台形III型	UIII型	NIII型
N	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1
%	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	1.3	1.3	1.3	1.3	1.3

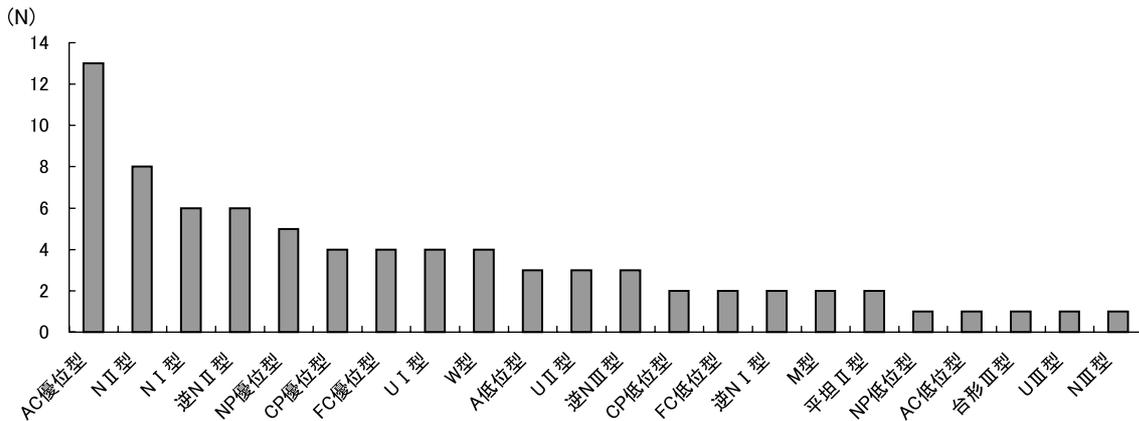


図7. 分類された個人エゴグラムプロフィール型の人数と出現頻度(%), N=78

4. 考察

(1) エゴグラムの平均値からみる学生像について

クラスごとで、それぞれどのような自我状態を有しているのかを調べたところ、共通して「母親的な役割を担う養育的な親」の部分が多く、「父親的な役割を担う批判的な親」や「客観的かつ論理的にものごとを理解できる大人」の部分が少ないことが示された。この結果は、エゴグラムにより保育学生の特徴を分析した中村ら（1997²⁾、1999³⁾）や、その性差を検討した永房ら（2006⁴⁾）の先行研究と一致するものである。「母親的な役割を担う養育的な親」というと、保育者を目指す学生らにとって非常に大切な部分であり、望ましい資質と考えられる。「母親」の良いイメージとして、思いやりがあり世話好きで優しく、愛情深く受容的に子どもを見守る姿が思い浮かぶ。しかしながら、行き過ぎると世話を焼きすぎたり甘やかしたり、過干渉になって子どもの自主性や自立性を奪いかねないであろう。「親」の自我状態のもう一方である「父親的な役割を担う批判的な親」の良い面、すなわちそのような良くない母親的な面を修正したり歯止めをかけたりする役割が必要となってくる。もちろん、過度な「父親」として、他人のいうことに耳を貸さずに排他的になる、独善的になってしまうという負の面も指摘されるが、厳しいことや制約することを敬遠しがちな風潮の中、優しいことやすべてを受容することが必ずしもよいことではないということを学生らが学び、そのような態度を身につけていくことが望まれる。

また、「子ども」の部分に比べて「客観的かつ論理的にものごとを理解できる大人」の部分が少ない

という結果が得られたが、実際に被験者である学生のほとんどは未成年であり、これから「大人」として成長していくことが期待される。看護学生の実習体験とエゴグラムとの関係について、大石ら(1996)⁵⁾は、入学時にA尺度得点が低かった学生らにおいて実習体験により有意な得点の増加が認められたことを報告している。もちろん看護と保育とでは実習内容は異なるが、保育実習においても、人と関わり、目指す専門職を実地体験する中で、自分の感情をコントロールしたり、主観的なものの見方を改めることができるようになるであろう。実習という特別な体験だけでなく、日々の生活の中で自覚を持って「大人」の部分伸ばしていくこと、また伸ばせるようにするための場を与えることなども必要であると考えられる。

ところで、子どもの頃に実際に感じたり行動したりした「子ども」の自我状態について、「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」と「親の影響を受けた順応した子ども」の2つに分けられている。「自由な子ども」は明るく行動的であり、自分の感情を素直に表現する、のびのび振舞うなどの良い面がある一方で、過ぎると自分勝手に行動のコントロールができず、周囲に対する配慮に欠けるなどの面が指摘される。「順応した子ども」は協調性があって周りに適応しやすく、忍耐強く、他者に対して寛大であるといった面がある一方で、従順で依存心が強く、主体性に欠け、自己否定しがちであるといったマイナスの面が強調されることも多い。自由でのびのびと過ごすことができ、いつも楽しく振舞えるということは、子どもと接する中でも大変重要なポイントであろう。その意味で、「自由な子ども」の部分をつまみでも持ち続けることが必要である。新人看護師における採用時と採用1年後のエゴグラム変化と職場適応との関連を調べた大塚ら(2005)⁶⁾の報告では、採用時にFC尺度の高い者では1年後のCPが高く、自我状態のエネルギーも高いことが示され、自分の思いを伝えることができる状況下でのびのびと勤務ができていると推測している。逆にAC尺度の高い者では1年後もACが高く、CP・A・FCと負の相関を示していることから、自分で考えること、思いを表出することなどができず、さらに依存的になってきていると推測している。足利ら(2002)⁷⁾による「子ども」の自我状態が看護実習中の不安に大きな影響を与えるとの先行研究もあり、「順応した子ども」の高い者すなわち「自由な子ども」の低い者におけるトレーニングなども必要であると考えられる。

(2) エゴグラムの平均値からみる学年間の比較について

1回生と2回生の性格特性について分析を試みた。1回生は入学からわずか半年後、2回生は1年半経てのテストの実施であった。2回生では多くの講義や体験を重ねていること、またN女子短大幼児教育学科第三部学生は、短大近くの会社で正社員やアルバイトとして働きつつ学生として3年間で幼稚園教諭の資格と保育士資格の取得を目指しているため、大部分の学生は同時に1年半の社会人経験も重ねている。このような部分で学年差が現れることを期待したものの、各尺度の平均得点は、「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」の自我状態以外すべて2回生が1回生を上回っていたが、その差は顕著ではなかった。これについて、まず、学生らの平均年齢が1歳しか変わらない同じ青年期の女子であり、発達的にみて集団としての差があまりないことが考えられる。先行研究において、同一の被験者によるエゴグラムの経年変化は多数みられるものの、学年間の差についての報告は少ない。しかしながら看護学生の特徴を学年間で比較した武藤ら(1995)⁸⁾の研究によれば、1・2年次と3年次で差が現れ、

FCの減少、PやAの増加などが認められている。この背景として、調査時の2年次においてもまだ基礎的な概論や一般教育などの講義が中心で短期間の基礎実習しか経験していないのに対し、3年次では専門科目の講義や実習が中心で体験に基づく深化の学習を行っているためと推測している。N女子短大においても、第三部の学生は働きながら3年間で単位を取得するため、2回生とはいえまだ履修していない専門科目も多い。実際、本研究において調査を行った講義も1回生と同じ内容の体育専門科目であった。今後、実習などの体験を重ねる中で、人間的に成長し新たな自我状態を獲得していくことが予想されるが、1回生にはない社会人としての経験がよい相乗効果を生み出す可能性もあり非常に興味深い。

(3) 個人プロフィールパターンから見る学生像について

各個人のエゴグラムプロフィールを作成し、どのパターンの学生が多いのかを調べた結果、「AC優位型」が最も多く、「N型」、「逆N型」、「NP優位型」といったパターンが認められ、ここから「親の影響を受けた順応した子ども」の自我状態を持った学生が多いことが示された。次いで、そこに「母親的な役割を担う養育的な親」の部分をあわせ持った学生や、「父親的な役割を担う批判的な親」の部分と同時に「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」の自我状態をあわせ持った学生が多いことが示された。学生ではない成人の一般健常者のTEGパターンを調査した先行研究においても「AC優位型」の出現頻度が最も高く、「N型」、「逆N型」、の出現頻度も比較的高いことが報告されており、N女子短大学生も一般的なプロフィールを示していたといえる。「AC優位型」は従順で協調性が高く忍耐強いなどのプラス面より、依存的で主体性に欠け、自分の意見を持たない、もしくは持っても口にできないなどのマイナスの面が強調されることが多い。今後、保育実習経験や就職などの中で、独立心をもちつつも周りとの協調していく姿勢を身につけることが期待される。

「N型」、「NP優位型」に共通にみられるのはNPすなわち「母親的な役割を担う養育的な親」の自我状態である。これは中村ら^{2) 3)}、永房ら⁴⁾の報告した保育学生の特性に一致しており、また看護学生や福祉学生らにも共通してみられる、好ましいといえる特性である。しかし「N型」ではNPとACが高く、CPとFCもしくはCPとAが相対的に低いプロフィールである。協調性をもって人の世話をできるという反面、世話好きで優しく(NP)断れない(AC)ために、他人から利用されたり、要求以上に人に与えてしまう姿や、我慢したり(AC)楽しんだりできない(FC)という姿がうかがえる。武藤⁸⁾は、看護師は看護師として成熟するにつれ、「N型」から論理的で計画的に物事を進めることができる「A優位型」や、NP・A・FCが高くCP・ACが低い、すなわち理知的で思いやりもあり自らも楽しんで事を行える「台形型」へと変化することを示唆している。「A優位型」について、新井ら(2006)⁹⁾は、介護実習前後のエゴグラムパターンが「N型」から「A優位型」に変化したことを報告している。また、高鳥ら(2006)¹⁰⁾は、理学療法学科における2年次と3年次の臨床実習の成績を上位群と下位群に分け、エゴグラムパターンの比較を行っている。その結果、上位群は2年次ではNP・FCが高い、すなわち優しく世話好きで陽気に楽しむことができる「M型」で、3年次ではそこにAが加わる「台形型」に変化し、群内比較により3年次のACが有意に低いことを報告している。一方、下位群は両学年とも「N型」であった。

N女子短大生では「AC型」「N型」を27名(34.6%)が占め、望ましいといわれる「M型」は2名

(2.6%)、「台形型」は1名(1.3%)であった。今後、多くの学生が保育実習だけでなく、日々の講義で基礎学力を身につけ、友人や周囲の大人たちとの関わりによって人間関係能力を養う中で、性格特性がどのように変化していくのか楽しみである。そのためには、良い部分を伸ばす一方で学生らの足りない部分を補完し、サポートする教員の姿勢が必要不可欠であると考えている。

5. まとめ

本研究は、N女子短大幼児教育学科1回生と2回生を対象に、東大式エゴグラム(TEG)を用いて、学生の性格特性を明らかにすることを目的に行った。その結果、以下のことが明らかとなった。

- (1) N女子短大生においては、「母親的な役割を担う養育的な親」や「子ども」の自我状態が多く、「父親的な役割を担う批判的な親」や「客観的かつ論理的なものごとを理解できる大人」の自我状態が少ない。
- (2) 1回生と2回生の性格特性には顕著な差がない。
- (3) 依存的な「親の影響を受けた順応した子ども」の自我状態を持った学生が多く、次いで、そこに「母親的な役割を担う養育的な親」の部分をあわせ持った学生や、「父親的な役割を担う批判的な親」の部分と同時に「もって生まれた自然な姿である自由な子ども」の自我状態をあわせ持った学生が多い。

〔引用文献〕

- 1) 下仲順子編(2004)臨床心理査定技法1 臨床心理学全書第6巻 誠信書房 pp.153-159
- 2) 中村陽一・渡邊ユカリ(1997) エゴグラムからみた保育者養成短期大学生の傾向 日本保育学会大会発表論文抄録, 50, 204-205
- 3) 中村陽一・渡邊ユカリ(1999) 保育者養成におけるエゴグラム分析の効果(2) 日本保育学会大会発表論文抄録, 53, 398-399
- 4) 永房典之・伊澤永修・星道子(2006) 保育学生のエゴグラムにおける性差の検討 東京文化短期大学紀要, 23, 1-4
- 5) 大石淳子ら(1997) 看護学生の初期の実習体験とエゴグラムとの関係 心身医学, 37, 2, P.157
- 6) 大塚邦子・石松直子・大内田真澄・江田柳子(2005) 卒後1年目看護師のエゴグラムの変化と職場適応との関連 日本赤十字九州国際看護大学 International research report, 3, 68-76.
- 7) 足利学・芳田章子・藤川千洋・天羽薫(2002) エゴグラムからみた実習中の不安が高い看護学生への早期介入の試み 心身医学, 42, 6, P.402
- 8) 武藤眞佐子(1995) エゴグラムからみた看護学生の特徴 岩手女子看護短期大学紀要, 3, 17-32.
- 9) 新井輝子・清水敦彦(2006) 介護福祉士養成課程における学生の倫理観の現状Ⅱ-学生の性格とアンケート調査から- 足利短期大学紀要, 26, 147-151.
- 10) 高鳥真・葦澤力・橋本尚幸・小林麻衣・一ノ本隆史(2006) 東大式エゴグラムパターンと臨床実習成績の関連-2年次と3年次の比較から- 理学療法学, 33, 2, p.468

〔参考文献〕

- (1) メディカル・フィットネス協会（監）（2002） スポーツ心理学<やさしいスチューデントトレーナーシリーズ 2 >. 嵯峨野書院
- (2) 東京大学医学部心療内科TEG研究会編（2006） 新版TEGⅡ 解説とエゴグラムパターン. 金子書房
- (3) 東京大学医学部心療内科TEG研究会編（2002） 新版TEG活用事例集. 金子書房